

在宅血液透析の現状と今後の課題

医療法人幸善会前田病院
古賀幸雄 金井田哲 森林徹
林和歌 中島唯 前田麻木 前田篤宏

【目的】

当院では 2017 年 10 月より在宅血液透析を開始した。在宅血液透析普及に向け医師・スタッフから患者へ療法説明やアンケート調査を行い、これまで 8 名の導入・管理を実施した。今回、導入に至らなかった患者の理由と普及に向けた当院の取り組みを報告する。

【対象及び方法】

2017 年 10 月より療法説明を行った患者 38 名（男性：31 名 女性：7 名）
年齢：58.1±11.2 歳、透析歴：3.3±4.6 年、原疾患 糖尿病性腎症：14 名、慢性糸球体腎炎：10 名、腎硬化症：1 名、その他：14 名
導入に至らなかった患者の原因を集計・検討した。

【結果】

在宅血液透析を拒否された原因は、本人拒否：14 名、介助者拒否：13 名、バスキュラーアクセス（穿刺）：3 名、透析液排水の Ph：7 名であった。
バスキュラーアクセス（穿刺）関連が原因で導入に至らなかった患者に対しては、長期留置カテーテルの挿入を行うことで、解決可能と考えられた。
透析液排水の Ph が原因で在宅血液透析を断念した患者も 7 名いたが、近年、メーカー各社から中性領域の透析装置洗浄剤が販売されており、これも解決可能と考えられた。

【考察】

介助者の反対により、在宅血液透析を断念した症例が 30%あり、患者のみならず同居家族の理解を深めていく必要があると考えられた。穿刺や透析液排液といった以前多く認められていた障壁は新たなデバイスの登場により解消傾向にあると考えられた。